

II. C'est ~ qui (que)... の構文

杉 山 正 樹

はじめに

前回の『主題と説述』のなかでは、おもに「主題」の強調について書いた。つまり、主題にしようとする辞項を正常な文の枠から抽出し、左方転移によって文頭に置き、これを強調する分割の構文である。主題として取り上げている以上、それは話者・聴者のあいだに何らかの了解がついたものであることは言うまでもない。

今回取り上げる C'est ~ qui (que)... の構文についても、前回の『主題と説述』のなかで、概括的なことを述べておいたが、今回はこの構文についてももう少し詳しく調べてみたい。

なお、ここで対象とするフランス語は現代の標準的な言葉、つまり平均的な教養を備えたフランス人が日常生活で話したり、書いたりするフランス語であって、芸術的薫りの高い文学的フランス語ではないということをおことわっておく。

提示構文としての C'est ~ qui (que)... の構文

強調とはなんら関係なく、ce がすでに話題にのぼった人物、物、事柄を受け、その正体を明かす文で、c'est の後に置かれる辞項中の名詞

II. C'est ~ qui (que)... の構文 (杉山)

にかかると関係代名詞は *qui*, *que* に限らず、関係代名詞であれば何でもよい。

前回に述べたように⁽¹⁾、関係代名詞の先行詞が *ce* または *celui*, *celle*, *ceux*, *celles*, あるいは *quelqu'un*, *quelque chose* のような不定代名詞, *qui*, *que*, etc. の疑問代名詞, *chaque*, *tout* (singulier) + 名詞, 疑問形容詞 *quel* に先立たれる名詞, *seul* や最上級の形容詞がつく名詞である場合には、それに続く関係節は限定形容詞節になるので、必ず提示機能の働きをする構文になる。

Voyager? *C'est ce qui* me plairait.

旅に行くですって? 行けたら、すてきでしょうね。

— *Qui est-ce, Charles? C'est celui qui* crie?

— *Oui, c'est celui qui* crie.

— だれだい, シャルルって? わめいている男?

— ええ, わめいている人です。

こうした場合、関係節は付加形容詞と同じ価値をもつ (*C'est un écolier qui travaille bien.* は *C'est un écolier bien travailleur.* と同じ意味) ので、全体は連結文となり、イントネーション曲線は、たとえば上例であれば *écolier* を頂点とする通常の山形を描く。

— *Nous cherchons une bande de Goths qui a été signalée dans la région!*

— *Hi! Hi! Hi! Nous aussi, nous les cherchons. C'est des Goths qui sont à l'Est!* (Astérix et les Goths, p. 15)

— 徒党を組んだゴート族がこちらへんをうろついていると通報があったので、捜しているのだ。

— へ! へ! へ! 俺たちも、そいつらを捜してるんだ。それは東部に住んでるゴート族のやつらだろ。

- Tu vois, Obélix, il faut être un peu plus rapide.
- C'est à cause de ces bains *que* tu m'as fait prendre. Ils m'ont affaibli. (Astérix gladiateur, p. 31)
- わかったか、オベリックス、もう少し (パンチに) スピードをつけなくちゃいけないんだ。
- これはお前に無理やり入らされた風呂のせいだよ。おかげで力が抜けてしまったんだ。(この場合、ce がパンチにスピードがないことを指していることは文脈で明らかになっている)

新情報の強調

ある発話のなかで、特に聴き手に伝えたいこと、あるいは聴き手がいちばん知りたがっていると思われる情報を強調するためには、さまざまな方法がある。話者がいちばん大切な情報と判断する語(群)を、他より強く、明瞭に発音するだけでも強調の役割は果せる。または、その語に表現アクセント⁽²⁾を置くだけでもよい。また、強調的表現をつけ加えたり、いわゆる強調構文と呼ばれるものを使う場合もある。

たとえば、対立的な強調をしようとする場合、

Paul a acheté un chat hier.

という文を出発点として、音による強調以外の方法で、さまざまな語(群)を強調すると、どうなるかを見ていこう⁽³⁾。

1) Paul を Pierre, Jacques,... などに対立させ、強調する。

この場合は、主語を新情報として強調することになるので、C'est ~ qui... の構文を使って、主語を説述の位置に置く。

C'est (bien) **Paul** *qui* a acheté un chat hier.

きのうネコを買ったのは (まさに) ポールだ。

あるいは、lui-même のような強調語をつけ加える。さらに、C'est ~ qui... の構文を併用することもある。

(C'est) **Paul lui-même** (*qui*) a acheté un chat hier.

II. C'est ~ qui (que)... の構文 (杉山)

まさにポールがきのうネコを買ったのだ。

2) acheter を donner, emprunter, vendre,... などに対立させ、強調する。

上記の強調構文では、動詞を強調することはできない⁽⁴⁾ ので、動詞のまわりを代名詞だけにして、他の辞項は正常な文の枠外に移動させる。

Il l'a **acheté** hier, Paul, son chat.

きのう買ったんだよ、ポールは、(彼のところにいる)あのネコを。

Son chat, Paul, il l'a **acheté** hier.

(彼のところにいる)あのネコなら、ポールが、きのう買ったんだ。

3) un を plus d'un, deux, trois... などに対立させ、強調する。

「一匹だけ」を強調するためには、un chat に強調語 seul をつけ加える。そのうえさらに、ne... que を併用してもよい。

Paul (*n'*) a acheté (*qu'*) **un seul** chat hier.

ポールはきのう一匹しかネコを買わなかったんだ。

4) chat を chien, fleurs などに対立させ、強調する。

この場合は、動詞の直接目的補語を新情報として強調するので、C'est ~ que... の構文を使って、直接目的補語を説述の位置に置く。

C'est **un chat** (,) *que* Paul a acheté hier.

ネコなんだ、ポールがきのう買ったのは。

このほか、ne rien... d'autre que の表現を使うこともできる。

Hier Paul *n'*a (**rien**) acheté (**d'autre**) *qu'***un chat**.

きのうポールはネコしか買わなかった。(猫以外は何も買わなかった)。

5) hier を avant-hier, il y a trois jours などに対立させ、強調する。

状況補語 hier を新情報として強調するので、C'est ~ que... の構文が使える。

C'est hier que Paul a acheté un chat.

ポールがネコを買ったのはきのうなんだ。

前提 (présupposition) と焦点 (foyer)

a) *C'est Pierre qui* a frappé Marie hier.

マリーをきのう殴ったのはピエールだ。

b) *C'est Marie que* Pierre a frappée hier.

ピエールがきのう殴ったのはマリーだ。

c) *C'est hier que* Pierre a frappé Marie.

ピエールがマリーを殴ったのはきのうだ。

これらはいずれも、

Pierre a frappé Marie hier.

ピエールはきのうマリーを殴った。

という発話が根底にあって、そのなかの Pierre, Marie あるいは hier が新情報として強調されている文である⁽⁵⁾。

a) の文は

Quelqu'un a frappé Marie hier.

ということが「前提」となっている。つまり「誰かがきのうマリーを殴った」ということは、話し手、聴き手の双方がすでに知っている事柄である。そこで、聴き手の知らない新情報、「誰か」に「焦点」を絞って、その「誰か」が「ピエール」であることを伝えるために、*C'est Pierre (qui a frappé Marie hier.)* を導き出す。

このように、文には「前提」とされていることを述べる部分と、その文によって新しく伝えられる情報を述べる部分がある。その新情報を文の「焦点」という。この場合、焦点は Pierre である。

b) の文は逆に、

II. C'est ~ qui (que)... の構文 (杉山)

Pierre a frappé quelqu'un hier.

ピエールはきのう誰かを殴った。

が「前提」となり、新情報 C'est Marie (que Pierre a frappée hier.) を導き出す。この場合、Marie が文の「焦点」である。

c) の文は、

Un jour Pierre a frappé Marie

いつかピエールはマリーを殴ったことがある。

が「前提」となり、新情報 c'est hier (que Pierre a frappé Marie.) を導き出す。この場合は、hier が「焦点」である。

この違いは、この3文を導き出す疑問文を想定すれば、明らかである。

a') Qui a frappé Marie hier?

b') Qui Pierre a-t-il frappé hier?

c') Quand Pierre a-t-il frappé Marie?

生成文法学者 Nicolas RUWET 氏の説によれば、a) b) c) は、

C'est Δ QU Pierre a frappé Marie hier.⁽⁶⁾

のような構造の公式から、抽出 (extraction) によって作られたとされている。

Δ は、代役記号⁽⁷⁾ で、この場合、焦点を当てられる辞項が抜き出されて入る場所を表し、今は空所である。

QU は、たいそう融通のきく機能をもつ要素で⁽⁸⁾、

- 1) Δ に嵌め込まれる辞項が主語の機能を果たすときは、関係代名詞 qui になり
- 2) それが直接目的補語の機能であるときには関係代名詞 que になり、
- 3) それが間接目的補語や状況補語であるときには、接続詞 que になる。

QU に続く根底にある文中の (動詞以外の) 焦点となる辞項を抜き出して、 Δ の場所に嵌め込んでいけば、上に挙げた a), b), c) の強調文

が得られる。

この場合、c'est Δ QU... は一体を成す要素で、焦点を強調するための枠組みのようなものであるから時制、数などを考慮に入れる必要はない。

焦点化 (focalisation)

話し手は、すでに話題に上った人、物、事柄を最初に提示し、それに関する何らかの新情報をあとに述べる (主題 → 説述)、というのが一般的な発話の形である。しかし、発話のなかに出てくる新しい要素に聴き手の注意を引きつけようとするときに、その新情報を焦点にするために使われるのが c'est ~ QU... の構文である。焦点を典型的に示す文は、疑問詞を用いて新情報を求める文 (ただし、質問者が本当にそれを知らない場合だけでなく、知っていて、しかも疑問があるような振りをし、話し手にその答えを出させることによる強調もある。念の為に付け加えれば、質問者は話し手自身であることもある) に対する答えである。

Qui a frappé Marie?

誰がマリーを殴ったのか?

この疑問文は、qui (誰が) がまさに焦点を指しているわけで、これに対する答えは、

1) 質問者が答を知っているはずなのに、どうしてそんなことを訊くのかといぶかしがるときには、相手の質問を主題にし、念のためにそれを繰り返した後で答える、

a) (Tu me demandes) qui a frappé Marie? C'est Pierre.

誰がマリーを殴ったかだって? それはピエールさ。

または、そのヴァリエーションである、

b) Celui qui a frappé Marie, c'est Pierre.

マリーを殴ったのは、ピエールだよ。

または、その主題部を省略した、

II. C'est ~ qui (que)... の構文 (杉山)

c) C'est Pierre.

それはピエールだよ。

となる。いずれにしても焦点 Pierre は c'est の属詞という形で提示される。

2) 相手が本当に未知の新情報を求めているのだと思って、素直に答えるときは、

a) Pierre.

ピエールだよ。

または、前提部を後半につけ加えた、

b) C'est Pierre qui a frappé Marie.

ピエールだよ、マリーを殴ったのは。

または、主題=前提部 qui a frappé Marie を省略した、

c) C'est Pierre.

それはピエールだよ。

である。b) は、質問に含まれる前提をそのまま繰り返すというよりは、それをより具体的に説明する場合のほうが多いように思われる。例えば、質問が、Qui a frappé Marie? ではなく、

Qui a maltraité Marie?

誰がマリーにひどいことをしたの?

であれば、C'est Pierre の後に、そのひどいこと (maltraiter) を具体的に説明する frapper を使って、

C'est Pierre qui l'a frappée.

ピエールが殴ったんだよ。

のように答える。

ただし、

3) *Pierre l'a frappée. (* は、文法的には成り立つが、この文脈では不適当であることを表す)

3') *Pierre, il l'a frappée. (Pierre が前置の主題である場合)

とは言えない。2) の a) のように、Pierre という焦点そのものを 1 辞項だけで答える場合や、文法上の語順制約で止むを得ない場合をのぞいて、「主語＋述語」を備えた文で答える場合に、文頭は（特に話しことばでは）たがいに了解のついている既知の旧情報が占める特権的な位置なので、新情報 Pierre がそこを占めることはできない。そもそも、3) や 3') の文形式は、旧情報を真っ先に出し、それを主題にして強調する構文である。それゆえ、新情報が求められるとき、その新情報を提示する形式としては不相当である。そこで、人、物、事柄の正体を明らかにするときに使う提示の表現であり、統辞的にも主語＋繫合動詞＋属詞（ないしは副詞的要素）の形式を整えている c'est ~ を流用して、「属詞＝説述の核」の位置に「焦点＝新情報」を入れ、必要があればその後 QU を使って旧情報である「前提＝主題」をつなげる、という形式をとる。

これは、話者の立場に立てば、相手に一番伝えたい情報を真っ先に言ってしまい、その後で主題をつけ加えるという説述 → 後置主題の配列を採用したということである。聞き手の立場に立てば、一番知りたい情報を初めに知らされ、後でいま聴いたのは、かくかくしかじかのことについてですと念を押された形になる。つまり、一番知りたい情報が強調されて伝えられたことになる。このように、c'est ~ QU... は新情報を焦点化する優れた形式であるといえることができる。

QU の品詞

上述のように、C'est Pierre qui a frappé Marie hier. で Pierre と a frappé の人称・数が一致していること、また C'est Pierre を C'est moi に変えれば、qui 以下も人称・数を moi にあわせて qui ai frappé に変わることからして、qui が関係代名詞であることは明らかである⁹⁾。

また、C'est Marie que Pierre a frappée hier. においては、que 以下の動詞 a frappée の過去分詞が前に位置する直接補語 Marie と性・数

II. C'est ~ qui (que)... の構文 (杉山)

が一致していることからして、この que も関係代名詞である。

しかるに、C'est hier que Pierre a frappé Marie. では、que を関係代名詞とするわけにはいかない。maintenant, à présent, aujourd'hui, un matin, etc. のような時を表す副詞を先行詞とする que は関係代名詞(副詞)とされるのが常であるが⁽¹⁰⁾、この場合は、第一 hier がその先行詞のリストになく、第二に「ピエールがマリーを殴った昨日、誰かが何かをした」ということが問題ではないのである。それならば、que の品詞を決定する前に、その機能を調べなければならない。

結合の道具語 que ⁽¹¹⁾

C'est Δ QU... 構文の場合、根底にある文の主語、直接目的補語が Δ の位置に入る場合を除いて、que の品詞を決める決定的な論拠は見いだされない。だが、その機能はどうなのであろうか。

1) C'est un beau pays, la France.⁽¹²⁾

(説述部) (主題)

美しい国だなあ、フランスは。

この文で、説述部の核を成す辞項は un beau pays で、それが焦点である。主題 la France は後置され、前置された説述部との間には声の休止がある。しかし、この文の説述部と主題の間に que を入れると、文は連結文になり、声の休止もなくなってしまう。

2) C'est un beau pays que la France.

(説述部) (主題)

1), 2) の根底にある文は、

3) La France est un beau pays.

であり、この属詞 un beau pays を強調構文 C'est Δ QU... の Δ の位置に入れ、根底にある文の動詞 être を省略すれば、2) の文が得られる。だとすれば、2) の que は属詞を受ける関係代名詞ということになる。

しかし、1) のような分割文においては、主題が文末に置かれれば、

主題の前に必ず声の休止が置かれる。この休止を埋める目的で *que* が挿入されることがあり、この *que* は発音上の空白を埋める以外に、何の意味も機能も持たない「空辞」である⁽¹³⁾ と解釈するほうがよい。これを仮に「つなぎの *que*」(*que de liaison*) と名づけておこう。

この「つなぎの *que*」は、ある種の条件付きではあるが、並置されている文と文をつなぐこともある。

4) Il est venu, j'étais malade.

彼が来た、僕は病気だった。

この2つの文に観念的なつながりがあると感じられるとき、この2つは心理的に結ばれて、ヴィルギュールで表されている空白が「つなぎの *que*」で埋められ、次のような連結文になる (俗語的)。

4') Il est venu *que* j'étais malade.

彼が来たのに (彼が来たとき)、僕は病気だった。

次の文でも、事情はまったく同じである。

5) Il viendrait, je ne lui parlerais pas.

彼が来るかもしれない、ぼくは口をきいてやらないだろう。

ヴィルギュールで表されている発音上の空白を埋めるために、話しことばでは「つなぎの *que*」を使って、

5') Il viendrait *que* je ne lui parlerais pas.

たとえ彼が来ても、口もきいてやらないだろう。

と言っても、意味内容は同じである。

同じく書きことばで、

6) A peine était-il sorti, elle éclata de rire.

彼はやっと外へ出た、彼女は吹き出した。

を

6') A peine était-il sorti *qu'*elle éclata de rire.

彼が外へ出るやいなや、彼女は吹き出した。

としても意味内容は変わらない⁽¹⁴⁾。

II. C'est ~ qui (que)... の構文 (杉山)

これらの que は一般には従属接続詞の一種とされているが、省略されても全体の意味に重大な変化を引き起こさないことと、ヴィルギュールによる声の空白を埋めるという機能はまさに「つなぎの que」である。そこに、「時」、「対立」、「譲歩」などのニュアンスを読み取ったとしても、それは文脈や文全体の意味からにじみ出たものであって、que にそのような意味があるわけではなく、2つの並置節を結びつける役割を果しているにすぎない。民衆語でよく使われる、倒置を防ぐための que⁽¹⁵⁾、挿入節を導入する que⁽¹⁶⁾ などもこの「つなぎの que」とみなしてさしつかえないだろう。

このような que が俗語のなかで使われることがある。文法家からは誤用とされているものである。

7) C'est la mère d'Eugène *qu'*elle fait le ménage.

ウジェーヌのお母さんなんだ、あの人が家のなかの掃除、片付けをするんだ。

ここに出てくる que は、まさに次の2つの文を結びつける役割をしている⁽¹⁷⁾。

7') C'est la mère d'Eugène, elle fait le ménage.

庶民の言語感覚では、このような心理的関連のある2つの文を que で結びつけ、1つの連結文にしてしまうのが自然なことなのであろう。上の7')のなかの elle が前文の la mère に等しいことに気づき、これをヴィルギュールと一緒に qui に置き換える作業をするのは、多少なりとも教養のある人のすることである。

7'') C'est la mère d'Eugène qui fait le ménage.

文法的には正しいとされる 7'') の文になっても、qui の前にごく軽い休止が置かれる⁽¹⁸⁾ こと自体、根底に2つの文があることの証拠である。

8) C'est cet homme-là *que* je le connais bien.

あの男の人です、あの人はよく知っています。

これも、

8') C'est cet homme-là, je le connais bien.

あの男の人です、私はあの人をよく知っています。

の2文を「つなぎの que」で結びつけたことは明らかで、後の文の le が重複しているので、これを除去すれば、que は関係代名詞の働きをする。

8'') C'est cet homme-là que je connais bien.

あの男の人なんです、私がよく知っているのは。

次に挙げる例文は、関係代名詞を使えば、その前に前置詞が要求される構文になる。こういうときにこそ、万能の接着剤 que が威力を発揮する。

9) C'est Marie que j'y (=lui) ai dit de venir.

マリーです、マリーに来るように言いつけたんです。

これは、

9') C'est Marie, j'y (=lui) ai dit de venir.

の2文を que で結びつけた連結文である。前文の Marie と同一人物を表す y (=lui) は、関係代名詞に置き換えるとすれば、前置詞 à を取って、à qui となるはずである。

9'') C'est Marie à qui j'ai dit de venir.

しかしながら、このような構文では、関係代名詞の前の前置詞が c'est の後に置かれる属詞の前にも繰り返される傾向が強くなり、9''')の文になる。

9''') C'est à Marie à qui j'ai dit de venir.

これは、古典期によく使われていた構文である⁽¹⁹⁾。この構文を使えば、c'est に続く辞項の機能がそこで明らかにされるので、à の繰り返しを避けるために à qui の代わりに「つなぎの que」が使われるようになって、現在使われている 9''''')の構文になる。

9''''') C'est à Marie que j'ai dit de venir.

この構文は、前置詞に先立たれない「時の副詞」にも適用されること

II. C'est ~ qui (que)... の構文 (杉山)

になる。この場合、que 以下の文中に、その「時の副詞」が繰り返されることはない。

10) C'est hier que Pierre a frappé Marie.

以上のことから、C'est ~ QU... の構文における QU の品詞の決定が極めて困難であり、関係詞のようでもあり、接続詞のようでもあるとしか言いようがないことがわかるであろう。また、c'est の ce が QU 以下の文を受けているのではなく、根底にある文のなかから聴き手が知らないであろう新情報を抜き出し、それを提示するための形式的な主語にすぎないことも推察できる。これは、疑問文を作るときの Est-ce que... の ce や que が意識のなかで分析されることがなく、動詞 être の時法に気をつかうことがないのと同じことである。

文法家たちの間でも、c'est ~ QU... の QU は、c'est と相関する道具語であるとする説、あるいは c'est ~ QU は強調しようとする要素を囲む小辞 (particule) とする説などがある。

限定的関係節と説明的關係節

一般に、関係節には限定的関係節と説明的關係節と呼ばれる2つの種類があるとされている。

1) Les enfants qui dormaient n'ont rien entendu.

眠っている子供たちは何の物音も聞かなかった。

2) Les enfants, qui dormaient, n'ont rien entendu.⁽²⁰⁾

子供たちは、眠っていたので、何の物音も聞かなかった。

1) の文なら、先行詞 enfants は、qui dormaient という関係節で意味の広がり制限され、制約を受ける。つまり、暗黙のうちに ceux qui ne dormaient pas (眠っていない子供たち) の存在に対立させられているのであって、その意味で限定的 (あるいは制限的) 関係節 les propositions déterminatives (ou restrictives) といわれる。この場合、先行詞と関係節との間に声の中断はない。

これに反し、2)のように、関係節の前後に声の休止が置かれ、それがヴィルギュールで明確に記されていれば、定冠詞で限定された *les enfants* は、「いま話題にした子供たちの全員」、または文脈から察せられる「そこにいる子供たち全員」を意味し、すでに *enfants* の意味の広がりには制限されている。したがって、*qui dormaient* を削除したとしても、先行詞の意味の広がりには重大な変化は起こらない。つまり、*qui dormaient* は、補助的な情報を付け加えたにすぎないということである。このような関係節を説明的（または同格的、または描写的）関係節 *les propositions explicatives (ou appositives, ou descriptives)* という。

説明的関係節は、さまざまな従属節（時、原因、条件、譲歩、etc.）の代わりをするといわれるが、上例 2) では、原因を表すことに重点を置けば、

3) *Les enfants, parce qu'ils dormaient, n'ont rien entendu.*

子供たちは、眠っていたので、何も物音を聞かなかった。

と書き直しても意味は同じであり、また時を表すことに重点を置けば、

4) *Les enfants, pendant (ou lors-)qu'ils dormaient, n'ont rien entendu.*

子供たちは、眠っているあいだ（とき）、何も物音を聞かなかった。

と書き直すことができる。しかし、関係代名詞が「時」、「原因」、「条件」、「譲歩」etc. の意味を持っているわけではなく、文脈がそのような意味を産みだしていることは、「つなぎの *que*」の場合と同じである。これらすべての根底にあるのは、次のような等位文であろう。

5) *Les enfants dormaient, ils n'ont rien entendu.*

子供たちは眠っていた、何も物音を聞かなかった。

上掲の説明的関係節の例文では、いずれにしても、先行詞との間に声の休止があることは明白だが、先行詞の意味の限定が完全になされていれば（これから挙げる下例では *ma sœur* につけられた所有形容詞 *ma*

II. C'est ~ qui (que)... の構文 (杉山)

で *sœur* の意味の境界がはっきり示されている), 声の休止やヴィルギュールは必ずしも必要不可欠ではない。

6) *J'ai trouvé ma sœur qui lisait dans le jardin.*⁽²¹⁾

わたしは妹を見つけたが、そのとき妹は庭で本を読んでいた。関係節 *qui lisait dans le jardin* は直接補語 *ma sœur* の属詞ではなく、*alors qu'elle lisait dans le jardin* と同価の状況説明文である。

前回の『主題と説述』で、固有名詞と指呼詞 (*moi, toi, ici, là, aujourd'hui, hier, etc.*) が限定節を受け入れないことを指摘しておいたが、それらは、通常、意味の広がりが見え、それ自体で限定されているため、付加形容詞や限定節でさらにそれを明確にする必要がないからである。したがって、固有名詞、指呼詞に後置される関係節は説明的ということになる。同じ理由から、上例のような所有形容詞に先立たれる名詞も、たいていの場合、限定節を受け入れない。

以上のことからして、*c'est ~ qui (que)...* の構文では、*qui, que* が関係代名詞の場合、限定節であれば普通の提示構文に、説明節であれば強調の構文になることが推察できる。なお、「つなぎの *que*」は、関係詞的であろうと接続詞的であろうと、すべて説明節である。

新情報のみを伝える *c'est ~ QU...* の構文

今まで述べてきたのは、すでに話題に上った (あるいは話者・聴者の間に了解のついている) 前提があることを条件とし、そのうえで新情報に焦点をあて、それを強調する構文であった。しかし、同じ *c'est ~ QU...* の構文を使いながら、前提のない新情報だけを伝える場合がある。

新情報だけの発話でいちばん自然なのは、新しい人物、事物の存在をまず確認し、その後でそこで紹介された人もしくは物がどうである、あるいは何をした、と述べる形式である。その意味で、『おとぎ話』の冒頭で人物を紹介するくだりは、その典型を示しているといえよう。

1) *Il était une fois un vieux roi qui n'avait pas d'enfants.*

むかしむかし年老いた王様がいました、しかしその王様には子どもがいませんでした。

この文で、un vieux roi qui n'avait pas d'enfants は、un roi qui avait des enfants 「子どものいる年老い王様」に対立しているので、qui に始まる関係節は弁別的ではある。さりとて先行詞 un roi には定冠詞がつけられていないのを見ればわかるとおり、それを完全に限定しているわけではない。この関係節全体を sans enfants にしたところで意味に変わりはあるまい。ここでは、ある王様が存在すること自体新情報なのである。そこで、まずその存在を非人称構文 il était (=il y avait) を使って確認し、次に話しの進行に必要な説明要素をつけ加えているのである⁽²²⁾。つまり、話しの進行の具合は、まず年老いた王様の存在を読者に知らせ、次にその王様を主題に取り上げ、子宝に恵まれないことを、これも新情報として読者に伝えるという順序である。したがって、qui には新情報を主題に変える力があるということができよう。したがって、この関係節は説明節の機能を持っていると見てもさしつかえないが、この種の関係節は先行詞を主題として新しい事態を述べるのに使われるので、述語的關係節 (propositions relatives prédicatives)⁽²³⁾ とでも名づけられるべきものである。

書きことばは別として、日常の話しことばでは、

2) Des enfants jouent dans le jardin.

子供が (なんんか) 庭で遊んでいる。

とは言わないで、

3) Il y a des enfants qui jouent dans le jardin.

と言う。

未知のもの、不確定なものを、初めて話題に上るものといった、「主題」になりえないものを、文の先頭に持ってくるわけにはいかない。これは、文を構成する要素は既知情報から新情報へと並べられるという「左方転移」の法則に照らし合わせても明らかである。そこで、初めて話題に上

II. C'est ~ qui (que)... の構文 (杉山)

る des enfants の存在をまず il y a で明らかにし、次にその子供たちが何をしているのかを、新情報を主題にする力をもっている qui を使って、述部 jouent dans le jardin につなげている。前述した俗語の「つなぎの que」を使えば、

4) Il y a des enfants *qu'ils* jouent dans le jardin.

なるところであろう。

il y a des enfants と qui (または qu'ils) jouent dans le jardin はそれぞれ新情報を提供しているのであるから、連結文でありながら、声に出されれば、それぞれが独立文の (あるいはそれに近い) イントネーション曲線の山を持つことになる。これが BALLY の言う「イントネーション曲線に2つの山をもつ文」⁽²⁴⁾ の意味である。

新たに話題に登場する人・物・事柄の存在を聴き手に確認させる表現は、中立的な il y a だけではない。微妙なニュアンスの違いはあるが、voilà (voici), c'est, 場合によっては、人物主語 + avoir⁽²⁵⁾ でも同じことである。また、登場する人・物・事柄が聴者にとって既知であっても、その場面で初めて話題に上るのであれば、それは新情報としての資格を立派に備えているといえる。

5) a) Voilà
b) C'est
c) il y a } le facteur qui passe.⁽²⁶⁾

いつもの郵便屋さんだ、郵便さんが通るよ。

この場合、facteur に定冠詞がついているということは、これが聴者に既知の人物 (像) を指していることを示している。しかしこの場面で郵便屋が話題に上るのは初めてである。いつもの郵便屋さんが出てゆくので時刻がわかること、または手紙を届けに家に寄ってくれる (らしい) ことも新しい情報である。この種の文では、qui... が前提になっていないので、これを日本語に訳す場合、「…のは～である」とするわけにはいかない。5) を「通るのは郵便屋さんだ」と訳したのでは、事態

を正確に伝えるどころか、何を言っているのかわからない。

上記3つの表現で、il y a で始まる新情報のみを伝える文では、関係詞が qui に限られ、voilà の場合は、補語が3人称のときだけ qui が使えるという制限がついているが⁽²⁷⁾、c'est ~ QU... の構文では、このような制限はない。こうした違いはあるが、基本的には同じ構造であり、同じ内容である。しかし、ここでは c'est ~ QU... の構文について述べるのが主眼であるから、それ以外を詳述することは差し控えたい。要するに、voilà, il y a, c'est は、新情報を紹介する導入詞と考えればよい。

なお、もう1つだけ avoir が繫合動詞として用いられている構文について触れておこう。次の例文は、牢番をしているローマ軍の兵士が近くの宿屋の亭主と交わす会話である。

- 6) — Patron! Vous n'auriez pas du persil?
 — Du persil? Pour quoi faire? ...
 — Pour me mettre dans les oreilles! J'ai un prisonnier qui chante tout le temps et c'est horrible!

(*Astérix gladiateur*, p. 24)

- 亭主! ひょっとしてパセリはないかね?
 — パセリですって? どうしようっていうんで?
 — 耳につめようっと思ってね。うちの囚人のひとりが、のべつまくなしに歌を歌っているんだ、それがまた聞くに堪えないひどいもんでね。

こうしたときに使われる avoir は、主語になっている人物とその直接補語が何らかの関係で結ばれていることを表しているだけで、所有の観念は希薄である。avoir の主語は、たいていの場合、qui 以下の文の動詞で表される動作・状態の「場」⁽²⁸⁾を示すにすぎない。例文 6) の j'ai は、ここで初めて話題に上る囚人が、自分の監獄にいること、その囚人が歌う「場」がその監獄のなかであることを示している。そして、そういう囚人がいることも、その囚人が歌うことも新情報である。

II. C'est ~ qui (que)... の構文 (杉山)

以上、新情報のみを伝える構文に幾つかの可能性があることを述べたが、要するに、動作、状態、または状態変化の主体であっても、それが文の「主題」になりえない新情報であれば、文の表層構造に見られる主語名詞+動詞連辞 (NP+VP) 型構文の、主語名詞が置かれる先頭の位置を占めることに違和感を生じ、特に話しことばでは、2つの新情報(主語名詞と動詞連辞)を qui を使って一括する傾向が生じたのであろう⁽²⁹⁾。日本語では、新情報を表す主格の助詞「〜が」があるのでそのようなことはなく、たとえば、「雲行きが怪しい」と言えばよい。しかし、その新情報の主語+述部連辞を一括して、c'est ~, voilà, etc. に相当する「〜だ」、「〜である」、「〜です」で締めくくり、「怪しい雲行きだ」と言っても、それが表す意味・内容に変わりがないのは、フランス語の場合と同じである。

新情報のみを述べるときの、想定質問は、Qu'est-ce qui se passe? Qu'est-ce qui arrive? Qu'est-ce qu'il y a? Qu'est-ce que c'est? Qu'est-ce que tu as (donc)? などと、これらと同じような意味を表す疑問文である。c'est ~ QU... 構文の場合も、QU は主格の qui であることが圧倒的に多いが、その他の場合もないわけではない。そして、c'est の後に置かれる辞項、節などが強調される。

I) QU = qui 主語

7) — *Que se passe-t-il?*

— *C'est un Gaulois qui s'est introduit dans le camp...*

(*Astérix le Gaulois*, p. 30)

— 何が起こったんです?

— ガリヤ人が一人この陣営に入り込んだのです。

II) QU = que 直接目的補語

次の例文は、『シラノ・ド・ベルジュラック』のなかの台詞で、ジョドレ (JODELET) がブルゴーニュ座の外で起こった叫び声 (On entend

des cris au-dehors.) の説明をその場にいる人々にするくだりである。

8) *C'est Monfleury qu'on hue!*

(ROSTAND: *Cyrano de Bergerac*, I, 4)

モンフルーリーをみんなが野次っているんだ!

こういう場合、*c'est* が省略されて、「名詞+関係節」だけで発話を構成することがよくある。

8') *Cyrano! — Qu'est-ce? — Une énorme grive qu'on t'apporte!* (Ibid. I, 7)

シラノ! — 何ごとだ? — ばかでっかいツグミを持ってきやったぞ (= ぐでんぐでんの酔っ払いを連れてきたんだ)。

III) QU = que 主語, 直接補語以外の辞項, 節 etc.

次の例文は『アステリックスとゴート族』の冒頭にある, 物語の背景の説明をするところで, 場所を表す副詞句が強調されている。

9) *Dans le village gaulois où habitent nos héros, Panoramix, le druide, prépare activement son voyage pour la forêt des Carnutes. C'est dans cette forêt qu'une fois l'an, tous les druides gaulois se retrouvent...* (*Astérix et les Goths*, p. 5)

主人公たちが住んでいるガリヤの村で, ドゥルイドの神官, パノラミックスは, カルニュートの森へ旅立つ準備をせっせとしている。この森のなかで, 年に一度, ガリアの神官全員が再会することになっている...

この強調は対立を表している。つまり, この森のなかで *que* 以下に述べるものが起こるのであって, ほかの森, どこかほかの場所ではないということを強調している。したがって, これに対応する想定質問は,

9') *Où est-ce qu'il se passe quelque chose?*

であって, *où* に対する答を強調したことになる。もちろん, *que* 以下

II. C'est ~ qui (que)... の構文 (杉山)

も quelque chose を明らかにする新情報である。

焦点と主題

上掲の 9) において, la forêt des Carnutes (カルニュートの森) は直前の文中に出てくるので, 新情報ではない。したがって, これを主題にして,

10) Dans cette forêt, une fois l'an, tous les druides se retrouvent...

と言うこともできよう。この場合, これに対応する想定質問は,

10') Dans cette forêt, qu'est-ce qui se passe?

であって, 9) とは異なる。10') だと, dans cette forêt は旧情報とされてしまい, 作者と読者のあいだの了解事項になってしまう。9) と 10) のどちらを選ぶかは, 作者の判断次第であり, 「カルニュートの森」のなかでの事件が物語の今後の展開にきわめて重要な役割を果しているのので, 「その森のなかで」を強調したければ, 9) の構文を取るであろうし, 森のなかの「出来事」のほうに重点を置けば, 10) の構文を取ることになる。強調されるのが, 状況補語である場合, 物語, あるいは発話の展開の伏線として, ある程度, 場面や時の説明がなされている場合が多い。9) においても, 直前の文では, 目的地を示す *pour la forêt des Carnutes* であり, 問題の文では, 場所の範囲を表す *dans cette forêt* となっていて, 場所の関係を表す前置詞は異なっている。したがって, 前置詞までひっくりめた *dans cette forêt* という辞項は新情報になり, そこに焦点を絞って強調することが可能になる。これを, 初めから主題にしてしまえば, 焦点は, おのずから, 説述部に移ってしまう。

そして, いったん *C'est dans cette forêt* で, 物語の舞台になる場所に焦点が当てられると, 今度はその新情報を主題に変える「つなぎの *que*」を使い, *dans cette forêt* を主題にした 10') の質問に答える新情報 *une fois l'an, tous les druides se retrouvent...* が新たな焦点になる。

したがって、イントネーションは、それぞれ新情報を表す2つの独立文が連なる、2つの頂点をもつ曲線を描くことになるが、「つなぎの que」で結ばれているので分割文にはならない。

心理的な新情報

例えば、歌劇『カルメン』の最終場面で、カルメンを闘牛場の前で刺し殺したドン・ホセが、その亡骸をかき抱きつつ、取り巻く群衆に向かって、

C'est moi qui l'ai tuée.

俺なんだ、彼女を殺してしまったのは。

と叫ぶ場面がある。群衆は殺人の一部始終を見ているのであるから、カルメンを殺したのがドン・ホセであることを知っているわけで、客観的には *c'est moi* が新情報であるはずがない。しかし、これを口にするドン・ホセの心理を察するに、殺人のときは、他の誰の存在も目に入らなかった、したがって誰も見ていなかった。そこで、はっと我に返ったとき、「俺なんだ、彼女を殺してしまったのは」と、ことさら「俺なんだ」という台詞を新情報として提供し、「俺を殺人犯として捕まえてくれ」と訴えていると見ることができる。つまり、これは心理的な新情報であり、こうした言い回しこそが、まさに強調の効果であると言えよう。新情報であるか否かは、話者の心理的判断で決まることであり、時として、客観的事実とは関係がない。 (続く)

註

- (1) 杉山正樹『主題と説述』(学習院大学文学部研究年報 第39輯) p. 246.
なお、ことごとについては、M. ARRIVÉ, F. GADET, M. GALMICHE: *La grammaire d'aujourd'hui*. (Flammarion, 1986) p. 606-607 も参照せよ。
- (2) 同上, p. 236.

II. C'est ~ qui (que)... の構文 (杉山)

- (3) 以下に挙げる例文は, Michel MARTINS-BALTAR: *De l'énoncé à l'énonciation* (Didier), p. 67 による。
- (4) 多くの文法書には, 例えば *Il dort sans cesse*. → *C'est dormir qu'il fait sans cesse*. (GREVISSE: *Le bon usage, 12^e édition*, 1991, Duclot, p. 745) のような例文で, 動詞の強調も可能と書いてあるが, それは自動詞のときに限られるようである。ここで取り上げた例文を使い, 上の例にならって, *Paul a acheté un chat hier*. → *C'est acheter un chat que Paul a fait hier*. とすれば, acheter un chat 全体が強調され, 例えば donner un chat, emprunter un chat, vendre un chat, etc. との対比なのか, acheter un chien, acheter un oiseau, etc. との対比なのかが曖昧になり, 純粹に acheter の強調にはならない。
- (5) ここに挙げた例文は, Nicolas RUWET: *Théorie syntaxique et syntaxe du français*. (Seuil, 1972) p. 28~29 にある Pierre a frappé Paul. をもとにして作った。
- (6) 同書には, C'est Δ que Pierre a frappé Paul. のかたちで載っているが, *Id.: Introduction à la grammaire générative*. (Plon, 1967) p. 211-212, にある QU 記号を使用して, このように表した。QU 記号の説明も同書による。
- (7) Δ 記号については, *Ibid.* p. 296. を参照せよ。
- (8) QU 記号については, *Ibid.* p. 211-212
- (9) SANDFELD は, この構文が C'est moi, (celui) qui a frappé Marie. から生まれ, 俗語では, その関係節の初期の形を守っているとして, C'est moi qui a cassé... 等の例を挙げている。cf. KR. SANDFELD: *Syntaxe du français contemporain, les propositions subordonnées*. (Droz, 1965) p. 121~122.
- (10) GREVISSE: *op. cit.* p. 1086.
- (11) SANDFELD は, 上掲書の中でこのような que を outil de liaison を名づけている。p. 131.
- (12) ここに挙げた例文は, G. MAUGER: *Grammaire pratique du français d'aujourd'hui* (Hachette, 1968) p. 128 から取ったものだが, BALLY が *Linguistique générale et linguistique française* (Francke Berne, 1965) p. 74~75 のなかで, この構文の詳しい分析をしている。
- (13) 川本茂雄『フランス統辞法』(白水社, 1982) p. 192.
- (14) 例文は H. BONNARD: *Notions de style, de versification et d'histoire de la langue française* (Classiques SUDEL, 1970) p. 48. Rem. この種の que については, ほとんどすべての文法書で言及している。
- (15) 例えば, *Peut-être qu'il viendra*. のような que である。cf. GREVISSE: *op.*

cit. § 1067, 2, p. 1619.

- (16) 例えば, Siècle de vitesse! *qu'ils disent.* のような *que.* *Ibid.*: § 374, Rem. p. 615.
- (17) 例文は, 川本, 上掲書, p. 231. この *que* については, SANDFELD: *op. cit.* § 109, p. 175~176 に詳しく記されている。そこで, SANDFELD は主格の関係代名詞として使われる *que* は, *qui* の *i* が語尾音消失 (*apocope*) によってできたものであろうと推測している。
- (18) J.-C. CHEVALIER, Claire BLANCHE-BENVENISTE, M. ARRIVÉ, Jean PEYARD: *Grammaire Larousse du français moderne* (Larousse, 1972) p. 104 には, 「関係節を使うために (主題部が) 後置されるこの言い回しは, 文が二分され, その間にごく軽い休止が置かれ, 特に音素 [k] が強く響くので, 現代フランス語でたいへんよく使われている。……」と書かれている。また, R. L. WAGNER et J. PINCHON: *Grammaire du français classique et moderne* (Classiques Hachette, 1962) p. 516 には, 「(この構文では) 切れ目があり, *qui (que)* の前に置かれる辞項に強勢アクセントが置かれることが前提とされる」と書かれている。
- (19) この間の推移についての詳しい記述は, SANDFELD: *op. cit.* § 80, 81. p. 127~128 にある。
- (20) 例文は, M. ARRIVÉ, F. GADET, M. GALMICHE: *op. cit.* p. 606. ただし, 限定的, 説明的というこの名称が適当でない場合が多い, と指摘しているのは BONNARD (*Grammaire français des lycées et collèges*, Classiques SUDEL, 1968 p. 47) だけではない。
- (21) 例文は, GREVISSE: *op. cit.* § 1059, 2, p. 1609.
- (22) 非制限関係節は, 話しの展開に必要な事柄をつけ加えるのに使われる場合がある。Cf. *Une inquiétude les saisit qui se dissipa bientôt.* (彼らは不安に襲われたが, その不安はすぐに解消した) SANDFELD: *op. cit.* § 153, p. 252)
- (23) Cf. 川本茂雄『フランス統辞法』(白水社, 1982) p. 230.
- (24) BALLY は前掲書 § 108, p. 74-75 で, イントネーション曲線に2つの山を持つ例として, *Il y a une chose qu'il faut reconnaître.* や *Voilà le train qui arrive.* または感嘆文の *C'est lui qui sera content!* などを挙げ, これは連結文中で説述を強調したり, 説述を主題に対立させるためだと説いている。
- (25) 「持つ」という動詞が状態を表す「ある」という意味に変化する過程についても, 多くの文法家が論じているが, 三宅徳嘉『「ある」と「もつ」補説』(学習院大学言語共同研究所紀要, 第1号 (1978)・第2号 (1979) p. 8-12. および Michiyoshi HAYASHI: *La phrase avec AVOIR et son complément*

II. C'est ~ qui (que)... の構文 (杉山)

prédicatif, type: *Sylvie a les yeux jolis*. (『フランス語学研究』 n° 15, 1981)
p. 40-45 を挙げておこう。

- (26) よく引用される例で、また諸文法家の方々が論じている構文であるが、木下光一『フランス語の非人称ヴァリエントと発話の意味構造』(『フランス語学研究』 n° 12, 1978) p. 6-9 に詳しい説明がある。
- (27) 朝倉季雄『フランス文法ノート』(白水社, 1981) p. 221, 234.
- (28) 朝倉季雄『フランス文法メモ』(白水社, 1984) p. 181.
- (29) GREVISSE: *Le bon usage* にも, *il y a, voilà* などが省略されて, 名詞で始まる文について, 「まず主語に注意を引きつけておいて, 述部は関係節の形式でその後に置かれる」と言う記述があり (§ 1061, c) *Onze heures déjà! et ma tante qui n'arrive pas!* (もう 11 時, それなのに叔母さんが来ていない) という例を挙げている。

参考文献

(ここには前回の『主語と説述』に載せたもの以外を挙げる)

- ARRIVÉ (M.), GADET (F.), GALMICHE (M.): *La grammaire d'aujourd'hui* [Flammarion, 1986]
- GREVISSE (Maurice): *Le bon usage, douzième édition refondue par ANDRÉ GOOSSE*, [Duculot, 1991]
- HAYASHI (Michiyoshi): *La phrase avec AVOIR et son complément prédicatif, type: Sylvie a les yeux jolis*. (『フランス語学研究』 第 15 号, 1981)
- MAUGER (G.): *Grammaire pratique du français d'aujourd'hui* [Hachette, 1975]
- RUWET (Nicolas): *Introduction à la grammaire générative, Deuxième édition corrigée et augmentée*. [Plon, 1968]
- RUWET (Nicolas): *Théorie syntaxique et syntaxe du français* [Seuil, 1972]
- 木下光一『フランス語の非人称ヴァリエントと発話の意味構造』(『フランス語学研究』 第 12 号, 1978)
- 三宅徳嘉『「ある」と「もつ」補説』(『学習院大学言語共同研究所紀要』 第 1 号・第 2 号, 1978, 1979)

(フランス文学科 教授)